

## 住居の原型

住居の原型は、広間型三間取 I 型いわゆる余呉型である。余呉型は伊香郡西浅井町の東部を縦貫する塩津街道から東南部一帯、坂田郡米原町にかけて分布している。基本的には妻入りである。湖北の民家の特徴である妻飾りは妻面の棟の下部分に太くて白い葦や茅、または、麻殻を並べ、扇形に配した 5 本の割竹で押えた形式である。この形式は、古くは白い部分を 5 ヶ所縄で締め固めたものであった。他に、棟の下部分の葦や茅を菱形に突出させただけの簡単な妻飾りもある。

平面構成は土間状のにわと板張りのだいとこの境に間仕切りがなく、その奥に板戸で仕切ったざしきとねまが並ぶ。だいいとは、古くはにうじ（入地）と呼ぶ形式で、一般にいう土座形式である。土間を 9cm 程度掘り込み、初殻を 18cm の厚さに入れ、藁を敷き、いろりを切り、土間との境にはフギ（覆木）を入れていた。初殻の代わりに藁を束ねて置く地域もある。

入地は保温が良く寒冷地では広い範囲で用いられたが、衛生上、好ましくなく、昭和初期から徐々に板張りになっていった。

架構橋形式は、にわとだいとこ境の両端の壁面から半間入った位置に 2 本の太い柱がたち、その柱の間に梁を架け、さらに、その梁と十字に交わる桁行方向の梁を架けており、特徴的である。

\*次ページに、天保 6 年(1835 年)新築時推定平図面

昭和 48 年改修前外観写真



18,628.5

985

3,958

3,988.5

4,772

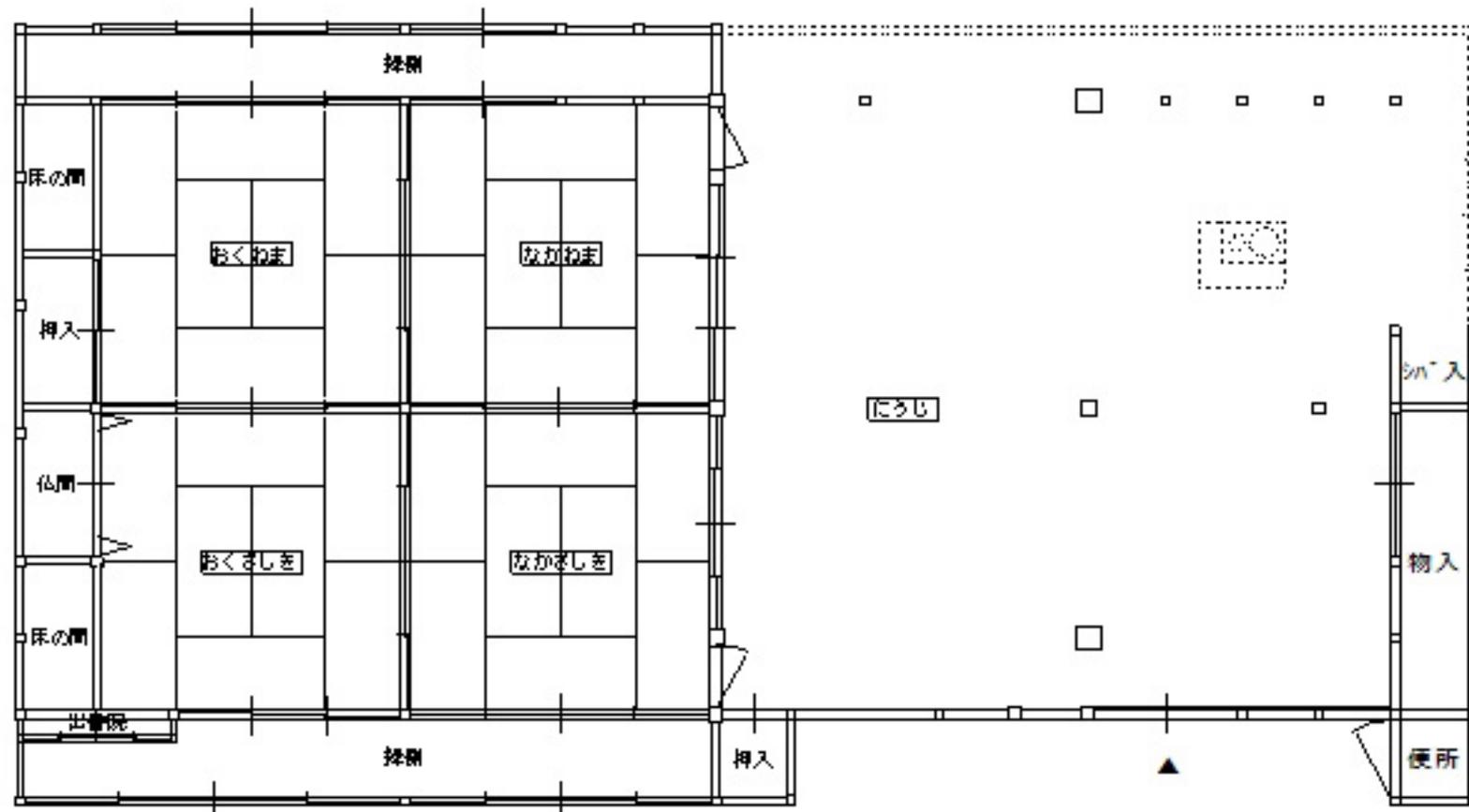
4,925

913

3,945

3,939

1,109



1,109

8,797

9,906

985

3,958

3,988.5

4,772

3,940

985

18,628.5